作品名	都市を縫う	作品番号	1/5
校名	日本文理大学		
氏名	川村　唯		

都市を縫う

別府に遺された都市軸を傷とみなし、建築と空間で縫合する

作品名	都市を縫う	作品番号	2/5
校名	日本文理大学		
氏名	川村　唯		

01 背景 ―人と交通がもたらすもの―

都市と交通

国際観光文化都市として名高い別府市は、2千以上の源泉により観光業を生業として栄え、陸や海を越え人々を受け入れる愛情と人情の街。観光には交通インフラが必須であり、市内外を経由する。

電車

バス

ロープウェイ

船

私たちが日々利用する交通機関。その中でも電車や新幹線といった線路を要するものは、時に土地を分断しながら世界中を駆け巡る。鉄道の敷設には、政治や経済が絡み合い、人間の私欲が現れる。廃線や未成線、未成駅などは、地図に記されないまま都市の中に遺される。

利権的な社会の中で生まれ、実現しなかった鉄道路線の数は1000件を超える

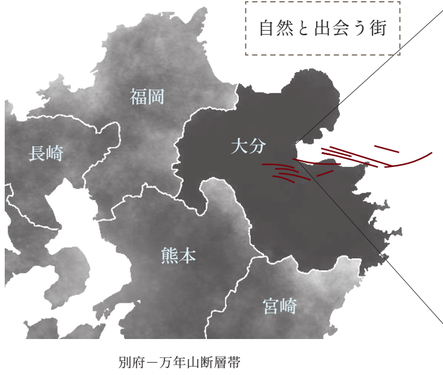
未成線
未だ完成していない路線、または計画があったが建設工事が途中で打ち切られたもの

未成駅
鉄道の駅が計画段階であった、または設置に向け工事中であったものが途中で頓挫してしまったもの

廃線
鉄道路線の廃止、またその廃止された路線のこと

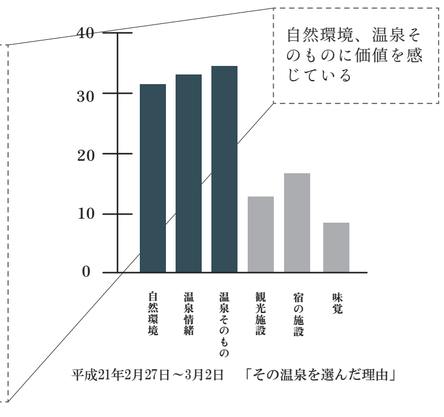
官能的に味わう街

断層がもたらした湯脈は、温泉という付加価値を街にを与えた。温泉による効能は高く、戦時中の傷病兵から一般市民まで多くの人の心や身体の傷を労わった。自然の恩恵である温泉に「浸かる」ことは、五感に直接働きかけ、その場所でしか味わえない官能的な「出会い」を経験できる。



別府－万年山断層帯

特徴的な自然環境



平成21年2月27日～3月2日　「その温泉を選んだ理由」

02 問い ―生きる理由と大地の本質―

人によって操作された大地

かつて誰の所有物でもなかった土地。人間が生き続ける上で街を発展させていくことは不可避である。しかし、未成線や未成駅が遺した跡は、人が土地をわが物にしようとする意図を明確にする。作り上げられた都市＝虚構の中で暮らす私たちは、その土地の持つ本質に気づかない。

生きている実感を求めて

高度化していく情報社会。身体を超えた経験の価値が肯定される現代において、自己のアイデンティティは希薄化する。

先行きの見えない現代社会において、不安や焦りは近くにある。社会的な立場や役割の中で、自分を探し、生きがいを問い続ける。

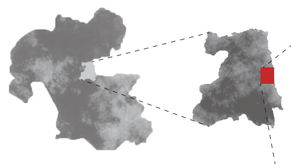
問題提起

虚構化した都市に潜む「本質」を見出すことで、元々の土地の姿を明確に、そしてより身近に感じることができるのではないか。人は本質に気づくとき、自分を見つけることが出来る。

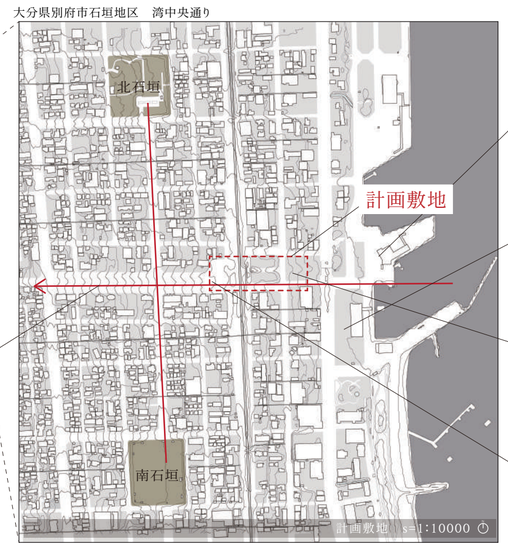
03 敷地 ―別府に遺された、出会いを失った場所―

人が侵した都市への過ち

新別府駅として開架予定だった土地。広場やロータリーなどの面積を持つが、人の姿もなく未完のままである。利活用もされず、人々はその異質さに気づいていない。



大分県別府市石垣地区　湾中央通り



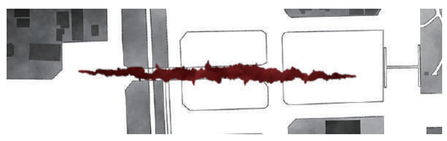
湾「中央」にあたる都市軸

広場やロータリーを思わせる敷地は、開架計画の構想として今もなお残る。港には、港駅としての施設が並び、敷地付近全体を交通の要衝として機能させようとしたのが分かる。

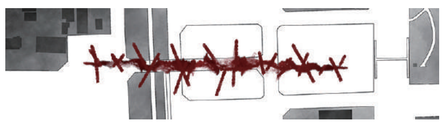
当該敷地は、別府市の中央部にあたり、山と海を繋ぐ有軸を持つ。軸線上には対称的に北と南に公園が配置され、都市軸が強調されていると推測。交通の要衝として機能し、街との出会いが生まれるはずであった湾中央通りは、都市の中の傷として残る。

04 提案 ―傷を縫うようにつくる―

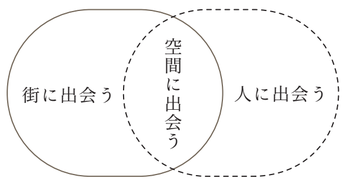
コンセプト



敷地を街の患部＝「傷」とし、建築と空間で縫合する。▶



患部をジグザグに縫うようにつくる。



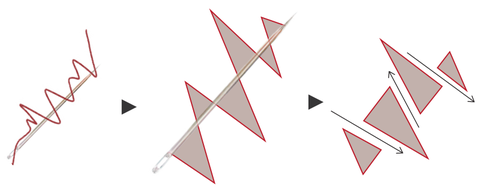
人が様々な経験と出会うことでドラマが生まれる場所、つまり「劇場」として全体を計画する。建築が独立するのではなく、土地の傷と人間の心に寄り添うことができる空間を提案する。

縫うとは出会うこと

縫 ＝ 糸＋逢

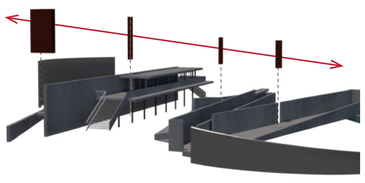
糸に逢うと書いて「縫う」。布と布を出合わせて糸を通し、縫い合わせる意味と、神の足と穂先が「出会う」意味を持つ。

平面ダイアグラム



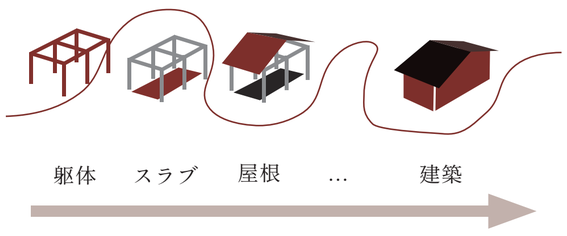
針が進む方向を都市軸とし、針がジグザグに縫っていくことで道をつくる。

都市軸の意識



赤い鉄板を挿入することで、海と山を繋ぐ。青い山々と海が、赤い軸と対比される。

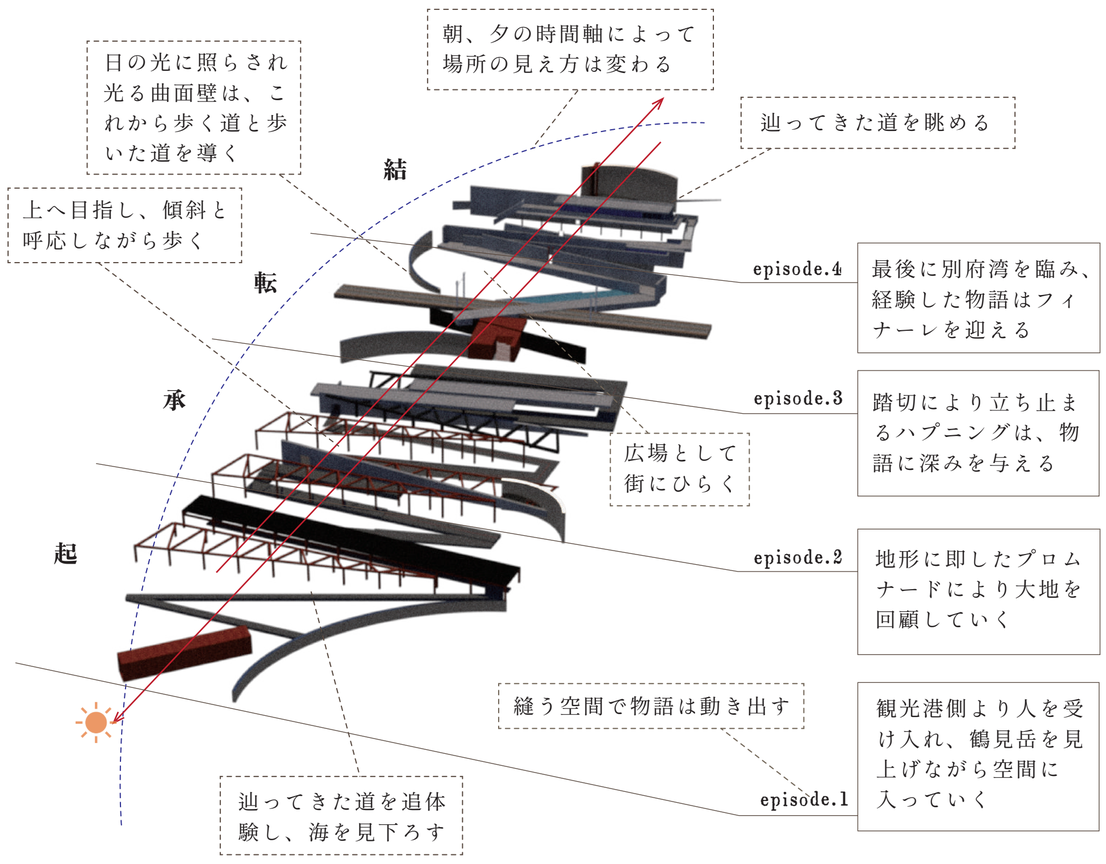
構成



面状の道を辿り、躯体、屋根、壁といった建築の構成要素を人が手に入れながら体験することで、自分の建築化を試みる。

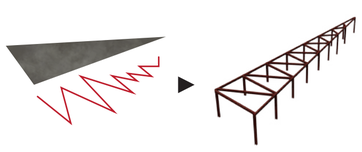
全体構成をプロムナードとし、まるで人生を辿っているかのような体験を与える。道の中央に赤い線を引き、建築内で進むためのガイドラインを設ける。

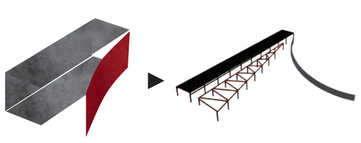
設計：全体構成

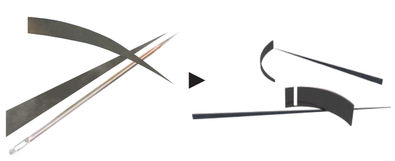


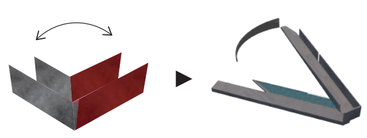
全体を劇場として構成し、空間を縫って歩いていく。各プロムナードは舞台になり、季節や時間と呼応した空間体験ができる。東西南北の軸が際立つ街であるため、太陽の位置と共に歩くことが出来る。

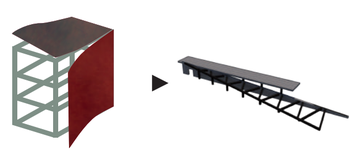
立体ダイアグラム


鋭角に挿し、ジグザグに梁を組ませる。


箱からめくれた躯体と外皮。


鋭角の壁が針のように刺し、シワが出来る。


箱がひらく。閉じる。


構造躯体はやがて皮膚を纏い、建築へ化す。

作品名	都市を縫う	作品番号	3/5
校名	日本文理大学		
氏名	川村　唯		

episode.1

◆

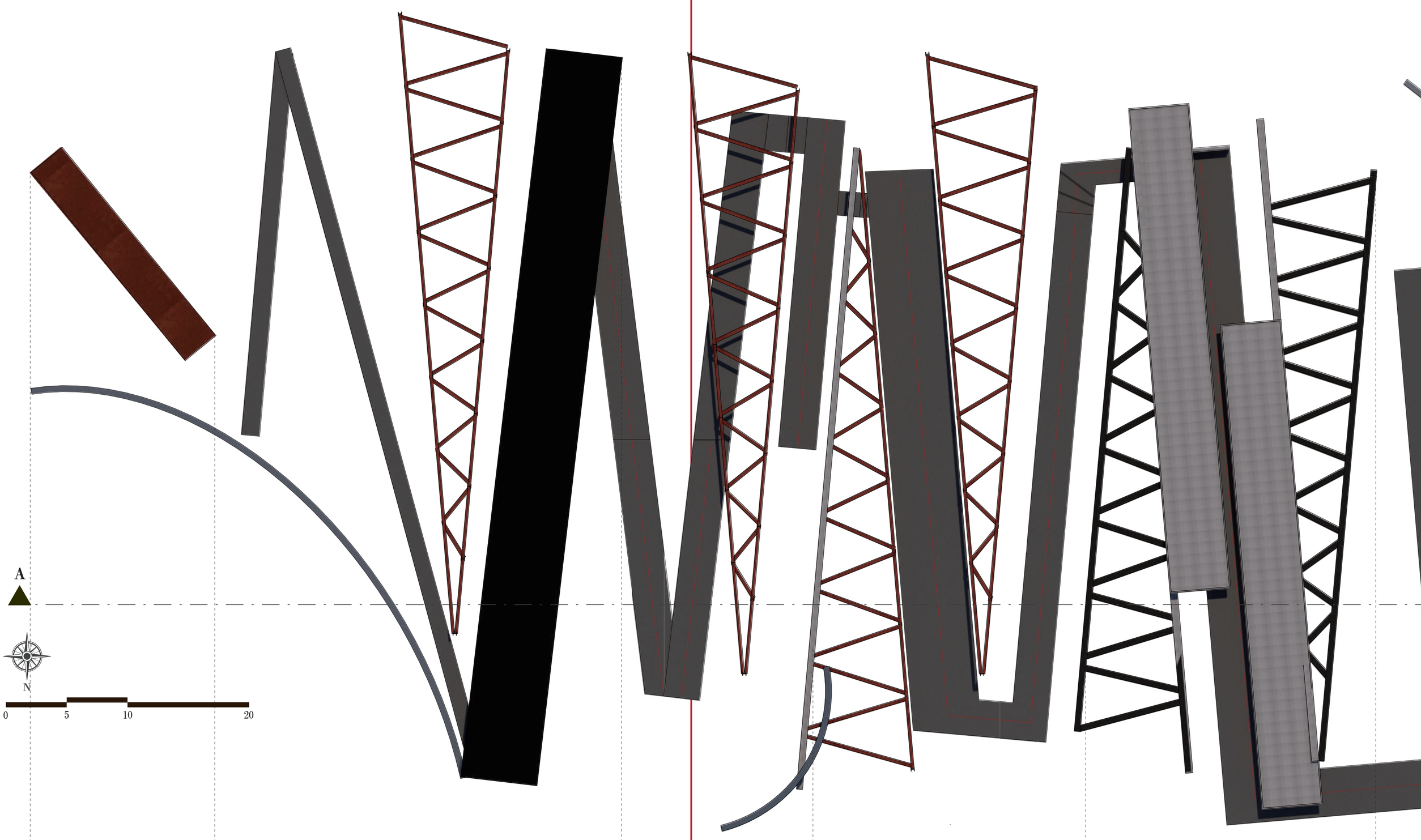
大地の息遣い

episode.2

◆

命は官能的に

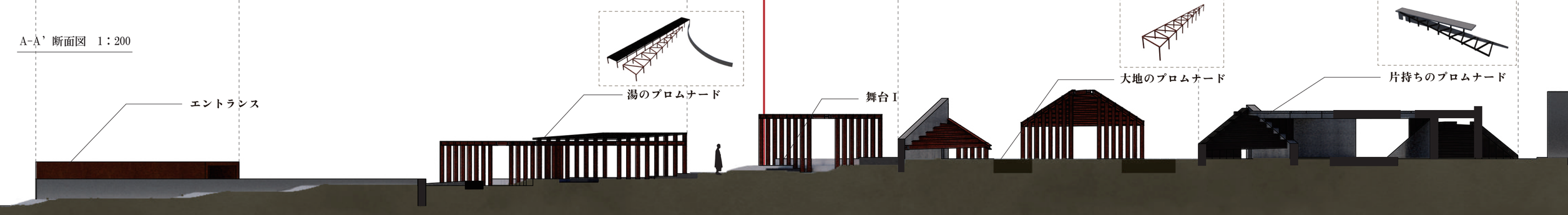
配置図　1：200



冬の朝、山には雪が積もり霧がかかる。
木は枯れ、鶴見から風が下りる。
この街は、息をしている

自然や人々が描き出す無数のドラマは、絶えず生成される。
劇場は、官能的に街を彩る。

A-A’断面図　1：200



人生という長い道のりの中、私たちは生きる意味を問い続ける。
操作され傷ついた土地とあなたが出会う。

傷を縫うとは、痛みや出血を伴うもの。
赤く錆びた鉄骨躯体は、人間味のある舞台装置となる。

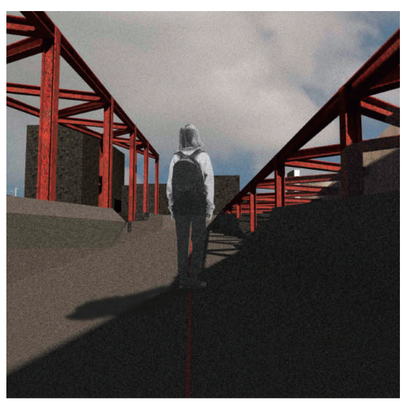
7:00　8:00　9:00　10:00　11:00　12:0

観光港から劇場へ誘う

肌がめくれたように躯体が見える

湯脈のプロムナード

躯体と舞台



大地に潜る

はみ出た構造体と建築

作品名	都市を縫う	作品番号	4/5
校名	日本文理大学		
氏名	川村　唯		

episode.3

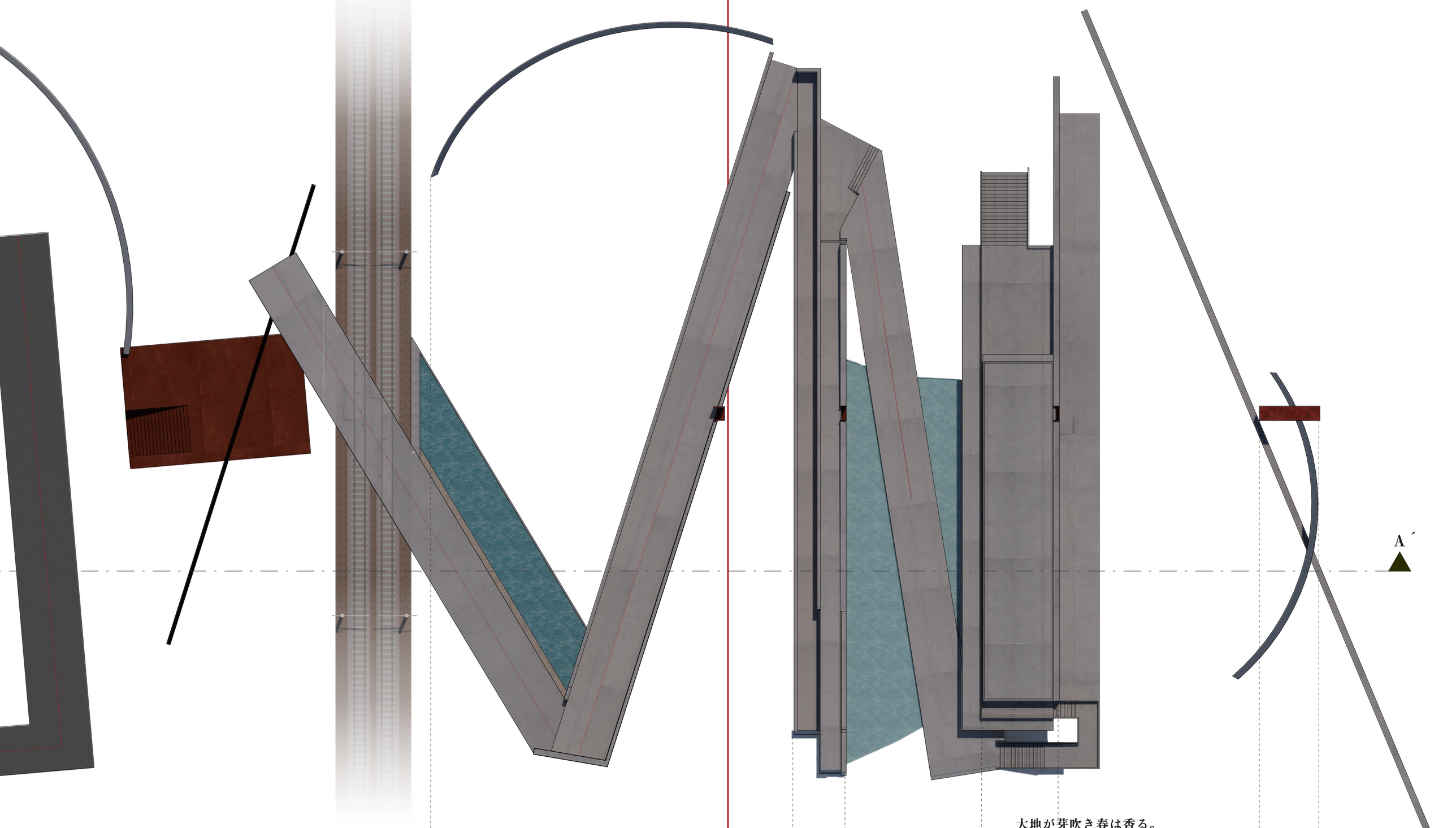
◆

線路と私

episode.4

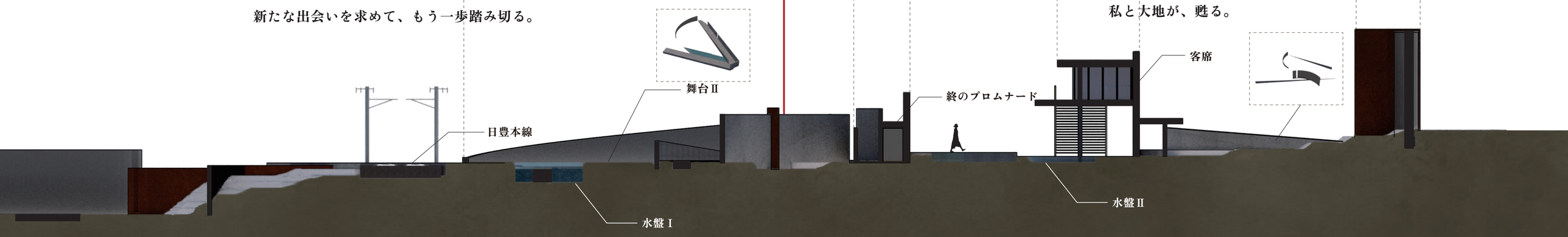
◆

雨は止み、道を照らす



時には立ち止まる時もある。
新たな出会いを求めて、もう一歩踏み切る。

大地が芽吹き春は香る。
目の前に広がる海は、あなたを包むように離さない。
私と大地が、甦る。

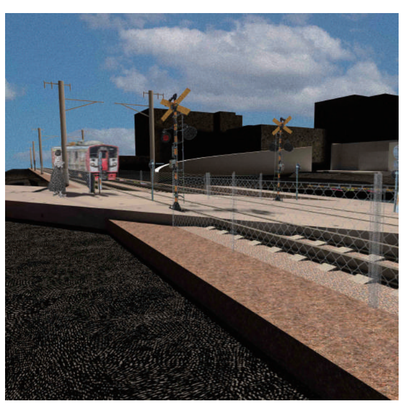


線路は、人間の傲慢さを映すエレメント。
大地を回顧しながら歩いたのち、突如無機質な空間に出会うことで人間の傲慢さに触れる。

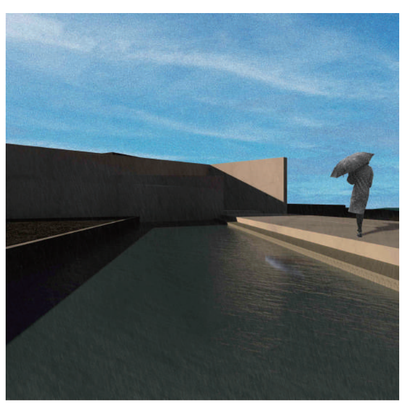
自分が縫って歩いてきた舞台を見る。
長い道のりに労いを込め、人生という劇場を賛美する。

12:00　13:00　14:00　15:00　16:00　17:00

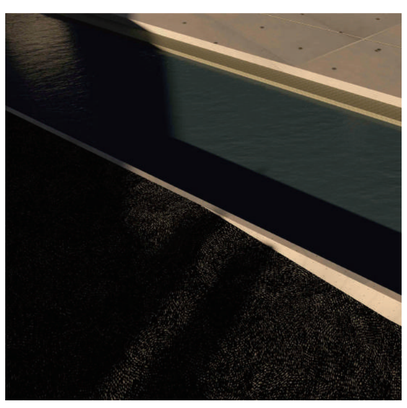
舞台へ上がり線路と対峙する



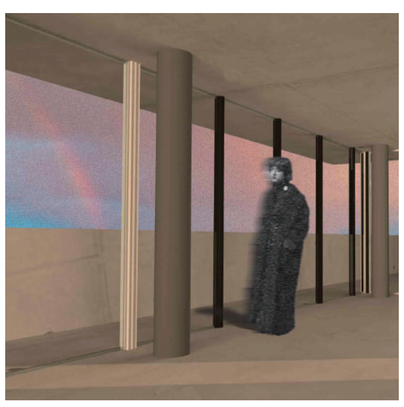
無機質な電車の音と踏切



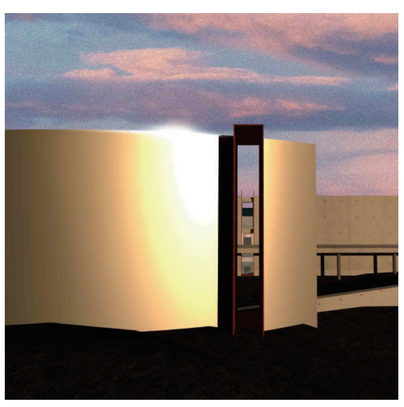
均質的な建築と出会う



電車と揺れる心、水面



眼下に広がる舞台を眺める



夕暮れは曲面壁を優しく照らす

作品名	都市を縫う	作品番号	5/5
校名	日本文理大学		
氏名	川村　唯		